

GHQ内の朝鮮人通訳たち

—— 検閲・非常事態宣言・朝鮮戦争

宋恵媛（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

はじめに 朝鮮／語と日本／語のあいまいな境界

金石範（1925年生）の日本文壇へのデビュー作となった「鴉の死」（1957年）は、1948年の4・3事件をテーマとした短編である。4・3事件は同年5月11日の南朝鮮単独選挙に反対する、済州島島民たちによる武装蜂起に端を発している。これに対し、権力側は済州島島民の集団虐殺を行った。在朝鮮米陸軍司令部軍政庁（以下、米軍政庁）の占領下にあった南半部のみでの選挙は、朝鮮の南北分断を意味するものだった。この朝鮮／語の世界を、金石範は日本／語で書いた。

同作品の主人公は、米軍政庁通訳の^{チョンキジュン}丁基俊である。彼は実は島民ゲリラ側のスパイであり、その任務遂行のために恋人と別れ、その恋人が両親とともに集団処刑されるのにも、感情を押し殺して耐えなければならない。後に在日朝鮮人文学の到達点の一つとなる長編小説「火山島」を執筆した金石範は、「鴉の死」を自らの作家としての原点だと位置づける。そのような作品の主人公に、なぜ通訳が選ばれたのだろうか。そしてその発想は、いったいどこから来たのだろうか。

実は、丁基俊のモデルとなった人物が存在した。関西の大学で英文学を専攻した同年代の男性である。本名を^{チョンビョンウ}丁炳雨という。金石範の青年時代を描いた短編「炸裂する闇」（1993年）にも登場する。それによると丁は、米軍が朝鮮の解放者だと考え、連合国軍最高司令官総司令部SCAP/GHQで通訳として一時期働いたが、まもなくその期待を裏切られたと感じて、SCAP/GHQを辞める。数年後に、仙台で北朝鮮と直結する組織の仕事をしているときに、同じ組織に属し

ていた金石範との再会を望んだが実現せず、その後、失恋が原因でダイナマイト自殺を遂げた。「鴉の死」には、いまだ植民地状態にある朝鮮の解放への渴求とともに、若き金石範に強い印象を残した丁炳雨の影が刻まれているのである。

朝鮮を舞台に、英語通訳を主人公にして日本語で書かれた小説。「鴉の死」における朝鮮／語と日本／語の境界の曖昧さは、読者を混乱させ、空間感覚を狂わせる。なぜなら、“丁基俊”は日朝のバイリンガル作家である金石範によって造型されており、かつ“丁基俊”は南朝鮮軍政庁と日本のSCAP/GHQのどちらにも存在する存在だからである。この朝鮮／語と日本／語の可換性は、支配—被支配関係にあった（南）朝鮮と日本が、第二次世界大戦後の新しい国際秩序の中で、ともに米国の傘の下に入った事実を支えられている。

1. 通訳・翻訳者はどこにいるのか

本稿の目的は、占領下日本で活動した朝鮮人通訳・翻訳者（その役割、業務は多岐にわたるが、ここでは総称として「通訳」を用いる）について明らかにすることである。米軍は日本と同時に南朝鮮も占領していた。1948年8月15日の大韓民国樹立とともに南朝鮮軍政庁は廃止されたとはいえ、米軍はその後とも同国への強大な影響力を保持した。

1940、50年代の朝鮮人米軍通訳については、米国内の朝鮮人留学生と朝鮮系移民二世の動向を、拙稿「朝鮮近現代史とトライリンガリズム：1940年代の朝鮮人米軍通訳」（『アジア太平洋研究センター年報』第16号、2018年3月）、「移動とマルチリンガリズム：OSS文書からみた太平洋戦争期のコリアン・アメリカン」（『アジア太平洋

レビュー』第16号、2020年1月）で論じた。これらは、複数言語の運用能力を備えた朝鮮人の集団が、米国内でいかに政府、軍の東アジア戦略に活用されたかを明らかにしたものである。

だが、日本占領時に朝鮮人が通訳として果たした役割やその実態については、その人たちが元米国留学生なのか、朝鮮系二世なのか、在日朝鮮人なのかも含め、まだ不明な点が多い。例外としては、朝鮮戦争の休戦交渉で通訳を務めた鄭敬謨（1924年生）の名が挙げられよう。朝鮮戦争勃発後、当時駐米大使だった張勉の要請で、留学中の米国から東京のSCAP/GHQに米軍輸送機で向かい、1950年10月下旬から米国防総省職員として勤務した人物である。その他にもいたとしても、95歳を超える高齢になっており、元朝鮮人通訳を見つけることも聞き取り作業も、今となっては極めて困難である。では、丁炳雨（GHQ勤務の詳細については、金石範も把握していない）や鄭敬謨以外の朝鮮人通訳はどこにいたのだろうか。

次の手がかりも文学作品の中にある。1948年4月に神戸で起きた、朝鮮人たちの民族教育闘争の弾圧（当時は朝鮮人側、権力側ともに「教育事件」と呼んだ）を扱った、同一作者による獄中報告（日本語）と戯曲（朝鮮語）である。獄中報告は1948年に、戯曲は1949年に書かれた。作者の朴元俊（1917-1972）は、当時、最大の朝鮮人団体だった在日本朝鮮人連盟（朝連）の準機関紙『解放新聞』（朝鮮語紙）の記者だった。両作品とも、検閲跡の残るブランゲ文庫のマイクロフィルムでしか、現時点では見られない。

朴元俊は1948年4月25日未明、兵庫県朝連本部宿直室で米兵たちに寝込みを襲われ、ピストルを突きつけられながら軍政部本部へ連行された。24日の23時過ぎに、占領下で初の非常事態宣言が神戸で発令されていた。取調べでの過酷な拷問等、生田署前の留置場での様子を詳細に描写した「獄中報告: 検挙と拳銃と棍棒」は、発表禁止処分を受けた。掲載誌である『民主朝鮮』1948年6月の教育事件特集号自体も、事件に言及した記事が一律発表禁止になり、発行できなかった。その一年後に発表されたのが、戯曲「群衆」（『烽火（ポンファ）』創刊号、1949年6月、朝鮮語）である。内容は「獄中報告」とほぼ同じ

で、演劇を通して在日朝鮮人たちに事件を広く知らせる目的で書き直したとみられる。「群衆」には、検閲者によって三か所が囲まれInfoと書き込まれており、添付された報告書に英訳が付されている。『烽火』所収の別の記事とは異なり、削除や発表禁止などの指示は書き込まれていないため、何らかの処分が下された可能性は低い。だが、最終判断は不明のままである。

両作品ともに、4月25日の夜に「建青」（朝鮮建国促進青年同盟）の白川という朝鮮人男性が、同じ建青員や居留民団員だけを選んで釈放させたことに言及している。「獄中報告」の方では、白川がその際に通訳を連れてきた、とある。

この二編からは、実在したであろう二人の新たな朝鮮人通訳・翻訳者の存在が浮上する。まず、「群衆」を英訳・検閲した朝鮮語のできる人物、そして白川という朝鮮人と一緒にいたという「通訳」である。

米軍の日本と南朝鮮の占領にあたり、日本語、朝鮮語、英語間の通訳の存在は欠かせなかった。とくに米軍の南朝鮮支配においては、朝鮮語と英語に通じた人員の確保は急務だった。米当局はアジア・太平洋戦争期に、対日情報戦のために朝鮮人の日本語能力を利用した。その後1944年からは、日本敗戦後を視野に入れてコリアン・アメリカンの朝鮮語語学兵の養成も始めていたが、人材は絶対的に不足していた。南朝鮮に到着した米陸軍情報部（MIS）部員（日系二世を多数含んだ）の最初の仕事の一つは、通訳・翻訳者を現地調達することだった。

1945年11月、米国から17人の朝鮮系の人々が、米陸軍第24軍団司令部に着任した。その一人である玄ピーターがそうだったように、米陸軍情報部語学学校（MISLS）で、日本語（1943年6月頃～）、あるいは朝鮮語（1944年8月～）の訓練を受けた米国籍を持つ朝鮮人語学兵たちは、日本ではなく朝鮮に送られた。米軍籍を持つMISやMISLS出身の朝鮮人が、終戦後に日本のSCAP/GHQで働いたという記録は探し出せない（Americans of Japanese Ancestry WWII Memorial Alliance, 'Files of All Those Who Served in 100. 442RCT MIS-MISLS and Attached Units' in "Echoes of Silence" 参照）。そもそも、MISLSで朝鮮語の訓練を受けたのは、ハワイ生まれを主とする朝鮮系二世たちであ

り、高度な日本語能力を持つ者はいなかった。一方、日本語－英語通訳が可能な元留学生の優秀なトライリンガルたちは、MISLSを経ずに戦略情報局（OSS）等の米政府機関に直接雇用されたが、彼らも戦後は南朝鮮軍政庁での朝鮮語－英語通訳として用いられた。

他方、日本占領にあたっても朝鮮語に通じた人材は不可欠だった。終戦当時の日本には200万人を超す朝鮮人がおり、それらの人々の朝鮮への帰還、出入国管理、思想調査などを行う必要があったからである。南朝鮮で38度線を挟んで直接ソ連と対峙していた米軍は、日本と朝鮮の共産主義運動の連動も警戒した。そのため、日本で行われた郵便や出版物等に対する検閲は、日本人発行の出版物のみならず、朝鮮人による日本語および朝鮮語の出版物に対しても、同じように行われる必要があった。現時点で確認できる日本での朝鮮人通訳の主な役割も、検閲者としてのそれである。

2. 検閲者たち

日本敗戦後、日本在住の朝鮮人の間では朝鮮語回復運動が急速に広まった。在日知識人の多くも、朝鮮人学校や朝鮮語メディアに関わった。朝鮮語文献を検閲する人材を米占領当局が必要とした背景には、35年もの間日本の植民地支配下に置かれ、朝鮮語の標準語も正書法も定まっていなかった混沌状態の中で模索された、在日朝鮮人たちによる言語における脱植民地化運動があったことを、まず確認しておきたい。

占領下日本での諜報活動や、1945年9月10日から49年10月31日まで行われた検閲を担当したのは、C.A.ウィロビー率いる参謀第二部（G-2）だった。その下に軍事、刑事を扱う対敵諜報部（CIC）と、民事を扱う民間諜報部（CIS）が置かれたが、非公然組織の民間検閲局（CCD、当初は「民間検閲支隊」）は、CISに属した。CCDは、郵便、電信、電話の検閲を行う通信（Communications）部門と、出版、新聞、演劇、映画、放送等の検閲を行うPPB（Press, Pictorial & Broadcasting）部門に分かれていた。CCDの職員数は、1947年のピーク時には8700名に上った（山本武利『日本人検閲者名簿解説』，“検閲研究ウェブサイト：日本と世界にお

ける検閲の歴史的研究” <http://www.waseda.jp/prj-Kennetsu/explain.html> 参照）。

A. 玄アリス

鄭秉峻^{トウゴン}『玄アリスとその時代：歴史にのまれていった悲劇の境界人』（トルペゲ、2015年）では、植民地被支配から南北分断へという朝鮮近現代史を象徴する、ハワイ生まれの英・朝・中・日の四か国語話者の社会運動家、玄アリスの生涯が辿られている。同書によると、玄アリスは1936年にハワイで米軍の中国語翻訳官として働いたことがあり、1945年末にSCAP/GHQで軍属として2か月弱東京で勤務した後、駐朝鮮米陸軍第24軍団情報参謀部傘下の民間通信検閲団（CCIG-K）に異動し、手紙、電報検閲や電話盗聴を行っている。GHQ勤務の事実は、上記の“Echoes of Silence”でも確認できる。

玄アリスが、13人からなる女性民間検閲隊の一員として、中国系二世1人、日系二世11人とともにハワイを発ったのは1945年10月23日、日本到着は11月1日のことだった。マッカーサー司令部の連合通訳翻訳隊（the Allied Translator and Interpreter Section, ATIS）に所属していた。東京ではCCDの通信部門に配属された。日本語と朝鮮語のいずれの能力を買われたのか等については未詳である。その後の異動先である南朝鮮のCCIG-Kでは、朝鮮系米国人の情報系統の職位としては最高位に就いている。

B. 通信部門の検閲を行った在日朝鮮人

前記の“検閲研究ウェブサイト”には、CCDに雇用された検閲者名簿が掲載されている。山本武利が明らかにした、1948年、49年度の第Ⅰ区（東京、仙台、札幌）の日本人検閲者のリストである。この第Ⅰ区での雇用者数は、全国の半分近くの比率を占めていた（山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』岩波書店、13頁）。全3区域のうち、第Ⅱ区の1945～47年分、第Ⅲ区（大阪、名古屋、松山）全て、第Ⅳ区（中国、九州）の占領初期以外の名簿は見つかっていないという。

1948年と1949年の東日本地区、という限定付きではあれ、この名簿には総計約1万4千人もの検閲者が含まれる。「日本人検閲者」の名簿ということだが、朝鮮人や中国人らしき人名もわず

かに見える。この中からは、Pak Jyongseo (朴ジョンソ) という、朝鮮名を持つ人物が一人見つかる。在日朝鮮人であろう。玄アリス同様、通信部門で働いた。1949年3月に初級検閲者 (Junior Examiner Translator、給与5340ドル/年) として初めて名簿に登場し、3か月後に中級検閲者 (Examiner Translator、同6300ドル) に昇級した。日本語と朝鮮語のいずれを担当したのかは不明である。また、判別は困難だが、Pak以外にも、植民地期からの日本名を使用して働いた朝鮮人がいた可能性もある。

C. 朝鮮語専門の検閲者たち

次に、朝鮮語出版物の検閲草稿から手がかりを探してみたい。プランゲ文庫所蔵の資料群である。G-2による検閲では、最終判断に至るまでの検閲者数は、記事によって2~5人と異なった。朝鮮語記事においては、朝鮮人は第一検閲者 (first examiner) として、問題となりそうな箇所の抽出と英訳を担当した。

もっとも早い時期の朝鮮人検閲者は、「Hyun Yl (玄イル)」(Hyun Y) である。『青年』(朝鮮建国促進青年同盟中央総本部文化部発行)、『朝連文化』(朝連文化部)、『オリニ通信』(在日本朝鮮人総連盟中央総本部) といった、1946年から1947年に出版された朝鮮語雑誌の検閲を行った。プランゲ文庫が作成した15,775点に及ぶ「検閲新聞記事 (Censored Newspaper Articles) リスト」(CNAリスト) の、1947年6月の『解放新聞』を担当した検閲者「J Hyon」も同一人物とみられる。なお、前述の玄アリス、ピーター姉弟と同姓だが、二人とは無関係だろう。

二番目の人物は、Chung Young Chu (丁あるいは鄭ヨンチュ) である。1947年から49年にかけて、朝連の準機関紙『解放新聞』、児童向け雑誌『ウリトナム (私たちの友達)』(ウリトナム社) 等の朝鮮語媒体を検閲した。CNAリストからは、Chung Young Chu (多くは「Chung」とだけ記されている) が担当した検閲記事が29件見つかる。すべて1948年のものである。なお、Chungの後の第二以降の検閲者は、たいていKawamoto Masaki (カワモト・マサキ) という日本人である。「検閲者名簿」によれば、カワモトは1948年1月16日にPPB部門担当の中級検閲者として雇用され、上級検閲者を経て特別検閲者に昇進し

た。『解放新聞』以外にも、『朝鮮新聞』、『国際タイムス』、『民青時報』、『朝鮮特信』といった日本語の在日朝鮮人メディア、そして日本共産党の『アカハタ』といった、当局が共産主義と結びつけて警戒した媒体を数多く担当した。

三番目の検閲者は、Chung H (Le?) ate (丁あるいは鄭ハ(レ?) テ) である。手書きのサインからは正確な名前は判読が困難だが、筆跡から判断すると、同じChungでも二番目のChung Young Chuとは別の人物である。朴元俊の戯曲「群衆」を含む、1949年6月発行の文芸誌『烽火』を担当した。

以上、プランゲ文庫の資料からは、Hyun Yl, Chung Young Chu, Chung H (Le) ateという朝鮮人翻訳者の存在が確認できた。だが、山本武利の「検閲者名簿」には、いずれの人物の名も見当たらない。Hyunの場合は、1947年以前の検閲者だったからと考えられる。三人とも、MISLS出身の朝鮮系米国人二世の名簿にも、米陸軍入隊記録Army Enlistment Records (<http://aad.archives.gov/aad/>) にも載っていないことから、現地採用された在日朝鮮人の可能性が高いといえそうである。

なお、日本語媒体であるが、1947年に第II地区で『新生愛知』、『和泉民報』(大阪で発行) を検閲した、Henryという人物の名がCNAリストに記載されている。これについては後述する。

3. 米軍服を着た朝鮮人通訳： ヘンリー・全の家族の証言より

〔写真1〕は、1945年9、10月に撮影された、ある在日朝鮮人の「米軍入隊証明写真」である。名前をHenry Chun (ヘンリー・全、1920年2月3日-1990年2月7日) という。〔写真2〕では、米軍服を着用したヘンリー・全が、GHQ本部が置かれた皇居前の第一生命ビル階で、朝鮮人らしき人々および米陸軍軍人とリラックスした表情で写真に収まっている。

筆者は2019年7月17日、ヘンリー・全の二男である全祥輔氏に、東京都内でインタビューした。全祥輔氏は1949年11月に神戸で出生。世田谷の東京朝鮮第八小学校から朝鮮大学校まで、一貫して朝鮮学校に通った。大学卒業後に、東京朝鮮高級学校の物理教師として数年勤務した

後、文東建が経営する神戸の三栄産業株式会社（現サンエイインターナショナル）の本社貿易部で、輸入業務に携わった。

今回、提供していただいた情報は、全祥輔氏がかつて父親の口から直接聞いた話、日本人の母親と三歳年上の兄、そして父親の知人や友人——文東建、徐鍾実、裴相善、金漢述、黄甲性など、神戸の「建青」（正式名は朝鮮建国促進青年同盟だが、全祥輔氏は「促進」を含まない「建国青年同盟」という名しか聞いたことがないという）、統一同志会関係者——から以前聞いた内容を総合したものである。以下からは、GHQ時代を中心に、ヘンリー・全の足跡を追っていききたい。〔 〕内は、筆者による補足である。

生い立ちと日本留学

ヘンリー・全は1920年2月3日、父・全浩先と母・金氏のもと、朝鮮の忠清南道錦山錦山邑中島里で生まれた。戸籍上の名は全三岩であるが、ずっと全熹^{チョンフイ}を本名と認識してきた。GHQでの勤務以後は、ヘンリー・全という名で通した。

朝鮮の家は精米店を営んでおり、母親は高齢で産んだヘンリーを溺愛した。父親はヘンリー・全が10歳頃に亡くなった。1935年、15歳の時に12歳年の離れた長兄の勧めで日本へ留学。東京・蒲田から、自由が丘にある自由学園高校部に通った。埼玉県川口の朝鮮人実業家が、生活費を援助してくれた。高校卒業後は、明治大学政治経済学部に進んだ。明治大学には聴講生として通ったが、ある日本人の教授の厚意と激励により、4年間正規学生と同じように受講し、試験も受けた。生活は楽ではなく、朝にパン屋でパンの耳を安く買い、それを土手の木の穴に隠し、帰りに食べたりしたという。

1941年、ヘンリー・全が大学2年生か3年生の時に、日本軍によるハワイ真珠湾攻撃が起きた。その当日、朝鮮人学生5、6人と集まり、今度の戦争で日本は負けるだろうから、その間に英語をマスターし、将来の朝鮮建国に向けて努力しようと誓い合った。英語の勉強法は、三省堂のコンサイス英和辞典を一日一枚ずつ暗記しそれを食べる、というものだった。また、仲間とお金を出し合い、明治大学英文科の日本人教授に何回か教えてもらったこともあった。父が後々まで、その時の友人たちと電話口で英語

で話していたのを、全祥輔氏は聞いている。

GHQで勤務する

ダグラス・マッカーサーが厚木航空基地に降り立った1945年8月30日、25歳だったヘンリー・全は横浜に向かった。全祥輔氏が母親の横山紀子氏に聞いた話では、その日ヘンリー・全は、金髪の米兵を東京の自宅に連れて帰ってきたという。母の目にはどう見ても白人にしか見えなかったが、ヘンリー・全はその米兵が朝鮮人と白人のハーフだと言った。夫妻は米兵をもてなし、彼の上司に横山氏の手持ちの着物を何着か贈った。その後、ヘンリー・全はGHQに採用され、米軍に入隊した。総司令部は9月17日に東京の第一生命ビルに移転していた。なお、横山氏は同ビルで朝日新聞の役員秘書として勤務していた。GHQで上司が挙げた英語名から一つ選ぶように言われ、フランス王アンリにちなんで「ヘンリー」に決めた。GHQには、米軍に入隊した朝鮮人は他にはいなかったという〔ただし、ヘンリー・全の名も、米陸軍入隊記録（Army Enlistment Records, <http://aad.archives.gov/aad/>）には残っていない〕。「当初は、アメリカ軍は解放軍だと思った。朝鮮半島の独立と平和をもたらすものと信じてしまった」、ヘンリー・全は後にこのように話していた。

当初、ヘンリー・全は、米国防総省が運営する米軍人向けの新聞*Stars and Strips*（『星条旗新聞』）の編集部に入り、*Beautiful Korea*という雑誌を作るようになっていた。しかし、この雑誌が出版されることはなかった。代わりに課されたのは新聞の検閲だった。朝日新聞等の日本語紙を担当したという。初期から神戸へは何度か行っていたようだが、1947年9月頃に神戸の軍政部に異動となり、一家そろって神戸へ引っ越した。

前述のように、1947年に第II地区である大阪地区には「Henry」という名の検閲者がいた。検閲者名にはふつう姓が記されるが、この人物が、通常コケージアンは担当しない第一検閲者であることや、時期と場所を勘案すると、ヘンリー・全だった可能性もないとは言い切れない。

神戸への異動

神戸、九州時代の活動内容の詳細は、その時

期も含め、家族にも不明な点が多い。

全祥輔氏はずっと、父が尊敬していた建青中央副委員長の徐鐘実^{ソジョンシル}に頼まれ、神戸に支部を作るため、在日同胞のオルグへ行ったものと思っていたという。たしかに徐鐘実は、1945年11月に神戸を来訪し講演会を開いており、翌月12月22日には建青兵庫県本部が発足している。朝連の共産主義的傾向を排して結成された団体だったとはいえ、当初は朝連と敵対していたわけではなかった。1946年1月27日には、朝連と共催で“進駐軍歓迎拳闘大会”が開かれている〔『神戸新聞』1946年1月25日付の広告、高佑二『在日コリアンの戦後史：神戸の闇市を駆け抜けた文東建の見果てぬ夢』（明石書店、2014年）参照〕。GHQ所属のヘンリー・全が、朝鮮人団体と「進駐軍」との間の橋渡しをした可能性が高い。

全祥輔氏がヘンリー・全から聞いている話は、以下のようなものである。神戸へやって来たヘンリー・全は、建青支部作りのために3人の朝鮮人有力者に協力を仰いだ。最初に訪ねたのは、後に赤坂のキャバレー“ミカド”のオーナーや近畿観光社長になる小浪義明だった。政治には全く関心がないといって小浪に断られたため、今度は山口組組長〔田岡一雄〕を訪ねた。朝鮮人だと噂されていたが、実際には日本人で、当然協力してもらえなかった。そして三番目に訪ねたのが、文東建だった。文東建は自らが委員長になることを条件に、引き受けた。建青にGHQから多大な資金援助が行われていたことはこれまでに指摘されてきたが、ヘンリー・全は、文東建を含む建青関係者へのGHQ物資の優先的放出に、中心的に関わった。

1948年4月の教育事件を機に、兵庫の建青は大きく揺れる。ヘンリー・全は後年、このとき建青は、後に民団と合流する単独選挙支持＝大韓民国支持派の人々たちに乗っ取られたが、それをGHQが背後で操作していたと認識していた。「南の李承晩政権にもつかず、北の勢力にもつかず、在日独自の民主勢力を作りたいことを望んだが、後に〔GHQに〕利用された」と述懐していたという〔建青初期の検証は、紙幅の都合もあり稿を改めたい〕。なお、この教育事件が、米軍による南朝鮮での単独選挙、すなわち韓国樹立の障害と認識されていた朝連組織の弱体化を狙ったものだったということは、これまで研究者

たちに指摘されてきた通りである。

4・24阪神教育事件

1948年4月25日未明から始まった、神戸での4日間で1,973人におよぶ在日朝鮮人の大量検挙において、建青は米軍や日本の警察の先導役となったといわれてきた。前述のように朴元俊は、その後留置場に“白川”という人物が通訳とともにやってきて、仲間を連れ出したと書いている。また、『民主朝鮮』特派員の朴永泰（金達寿のペンネーム）は、建青員が留置場で建青への入会や南朝鮮での単独選挙支持を条件に釈放してやると言い、「〔建青〕兵庫県本部委員長〔玄孝變^{ヒョクソン}〕名義による「釈放認定」のパスポートを発行し、それをまた五千円内外の値で売りつけた」と書いている（朴永泰「挑発者は誰か？：日・鮮反動連合の正体をばくろ」『民主朝鮮』1948年6月〔未発行〕、39頁）。1949年1月に東京で何者かに殺害されることになる玄孝變は、SCAP/GHQの対敵諜報部（CIC）にとって、神戸、大阪地域における最も重要な情報提供者だった（Spot Intelligence from C.A. W. to Chief of Staff, 14 Jan. 1949, Subj: Assassination of Prominent Rightist Leader. 鄭榮桓『朝鮮独立への隘路：在日朝鮮人の解放五年史』法政大学出版、2013年、222頁参照）。この「釈放認定書」は米軍政部によって発行されているが、ヘンリー・全がこれに関わったかは不明である。全祥輔氏は父の思想からしてそれはあり得ないという。

全祥輔氏は、玄孝變の名は聞いたことはないが、“白川”という人物〔全祥輔氏は裴相善と推測する〕には心当たりがあるという。この直後に、単独選挙をめぐる建青が分裂したことから、留置場を訪れた「建青員たち」は一枚岩ではなく、実は対立する二派に分かれていたとみられる。ヘンリー・全が、単独選挙に反対した文東建や“白川”と関係が近かったことを考えると、一緒に来た「通訳」とは、ヘンリー・全のことなのかもしれない。

ヘンリー・全は、検挙に協力するどころか、逆にこの時に捕らえられた朝連関係者を釈放するため行動した。韓国へ強制送還され死刑に処される恐れのある人々を、裁判が開かれる前に救ってほしいと朝連から要請されてのことだった。受け取った大阪の朝連幹部約20人の名簿

を手に、数名の仲間と米軍服姿で大阪の警察署にジープを乗りつけ、GHQが身柄を預かるから直ちに釈放しろと英語で怒鳴り、助け出したという。これを裏付ける資料は見つからないが、文東建「建青と袂を分かち統一同志会を結成。その後、総連副議長になる」をはじめ、ヘンリー・全の周囲にいた神戸の建青関係者の息子たちが全員、朝鮮大学校の卒業生である事実一つとっても、彼がこのとき朝連を弾圧する側についてとは考えにくい。

この民族教育事件で、神戸では日本人1人を含む9人が米軍の軍事委員会の裁判にかけられた。1948年5月20日の公判第一日目は、英語のみが法廷用語として使用された。布施辰治弁護士の激しい抗議により、二日目からは日本語への翻訳を行うことになった（『朝連中央時報』1948年6月1日付）が、朝鮮語使用は認められなかった。ヘンリー・全とこの裁判との関わりは確認できないが、その可能性は低いとみられる。

なお4月26日の大阪での抗議デモで、警官隊による発砲により金太一が命を落とした。金石範はその銃声を直接聞いている。

九州への出張

ヘンリー・全は、神戸から九州によく出張に出かけていた。だが、そこでの仕事内容を周囲に具体的に話すことはなかったという。

一つ考えられるのは、米・日当局が「密航者」と規定した朝鮮人たちの調査、訊問である。GHQは1946年6月12日、朝鮮からの密航船の捜査を日本政府に指令した「日本への不法入国の抑制に関する覚書」を出している。この際に、佐世保帰還援護局内に不法入国者収容所が開設された。逮捕者は米軍に引き渡された〔不法入国予防の責任は、1949年11月に日本政府へ移管〕。

密航者取締まりに関する業務だったのではないかと筆者が全祥輔氏に尋ねたところ、違うと思うとの回答を得た。後述のように、後年のヘンリー・全はむしろ、捕らえられた朝鮮人の釈放に尽力していたという。なお、1950年10月1日、不法入国者収容所は日本外務省の出入国管理庁の管轄となり、針尾入国者収容所に改組された。12月にそこからほど近い大村へ移転し、大村入国者収容所となる。主に朝鮮人を収容し

た、過酷、劣悪な環境で悪名高い収容所である。

1950年6月25日の朝鮮戦争勃発直前、ヘンリー・全は「朝鮮での戦争を止めるために動いたが、それが無理だということを悟り」、GHQを辞めて一家で東京に戻った。全祥輔氏は、「建国の志を抱いて、GHQの力を借りて〔それを実現しようとした〕。そうしたら逆の方へ回転していった。自分は何をやったんだろうということで、東京に来た」、こう父親の当時の行動を分析する。GHQ物資を扱える立場にあり、自らにも財産がある程度あったはずだが、全て神戸に置いてきたという。全一家は当初、駒沢にある妻の親戚の家に仮住まいをし、かつかつの暮らしをしていたという。

その後

GHQでの仕事を辞めた後も、ヘンリー・全は米軍人たちと繋がりを保った。軍人たちから払い下げられた外国製の車のディーラーとして働いたりもした。全祥輔氏は、小学4年生だった1958、9年に、座間キャンプで米軍人の家族に誕生日を祝ってもらったことがある。このとき初めて、本物のオレンジジュースを飲み、アメリカンフットボールを見たという。

また1950年代には、東京のクラブで知り合った高松宮宣仁の協力を得て、大村収容所に収容された密航者の釈放の手助けもした。収容者の家族から連絡を受けたヘンリー・全が高松宮に助けを求めると、高松宮は大村収容所に電話をし、直ちに所出させたという。全祥輔氏が記憶しているだけでも4、5件、そのようなことがあった。

1960年代には、在日朝鮮人の土木工事請負業者に軽油を売る、オリオン石油というガソリン卸会社を駒沢で経営した。1960代後半には、在日本朝鮮人総聯合会（総連）の在日本朝鮮文学芸術家同盟に属していた若者たちも雇用した。金日成の唯一思想体制への移行期で、総連組織が揺れていた時期のことである。そこでは、日本の文壇デビュー前の李恢成も、小型トラックの運転手として一時期働いたという。1970年代初めのオイルショックで商売が行き詰まると、今度は不動産業を手がけた。

ヘンリー・全は、1980年代後半に故郷訪問のため朝鮮籍から韓国籍に変更したが、その直後に

病気が見つかった。そして、15歳で朝鮮を後にしてから一度も故郷の土を踏むことなく、1990年に日本で逝去した。

おわりに

本稿では、占領下日本における朝鮮人米軍通訳について明らかにした。資料の制約から未詳の点も多いが、鄭敬謨の他に少なくとも6人の存在が確認できた。ただし、米政府・軍関係の資料から確認できた人物は玄アリス以外にはいない。代表機関のない植民地出身者であり、「日本人」でも日系人でもない曖昧な立場にあった

ことも、各種資料から漏れている理由の一つだろう。それぞれの人物についてのさらなる調査と、新たな朝鮮人米軍通訳の探索、朝鮮戦争時に日本から米軍通訳として従軍した作家の麗羅等の考察については、後日の課題としたい。

〔謝辞〕 ヘンリー・全についての情報および写真を提供して下さった全祥輔氏、検閲者や検閲文書等について数年来、細やかにご教示下さっている米メリーランド大学のブランゲ文庫館長ジェンキンス・加奈氏に、心よりの感謝の意を表する。

*本研究は科研費17K02666の助成を受けたものである。



〔写真1〕ヘンリー・全「米軍入隊証明写真」。
1945年9月



〔写真2〕GHQ本部のある第一生命ビル1階にて。前列
左から二番目がヘンリー・全。1945年か1946年・東京



〔写真3〕後に建青兵庫県本部執行委員長となる金漢述（左）とヘンリー・全（右）、1945年か1946年・神戸